

ふるさと 見て歩き

第82回

移動する寺 — 照願寺編 —

鷺子の照願寺は親鸞聖人の直弟24人が開いた「二十四輩」の寺として知られています。

照願寺の寺伝では、寺の開基となった念信は、元は武士で、俗名を高沢伊賀守氏信といい、親鸞に帰依して貞応元年（1222）に毘沙幢びしゃどうの地（小舟）に一字を建てたと伝わります。

照願寺の山号は現在も「毘沙幢山」といいます。この地名は小舟の吉田鹿島神社の東麓に伝承され、「寺山」という小字も残っています。地元ぢよんの伝承では、まさにこの場所に照願寺があったと伝えられていて、寺伝とも一致します。照願寺の前身となる草庵は、この地から始まりました。



▲「毘沙幢」と伝わる地（小舟） 写真提供 高橋宏和氏

寺があったとされるこの場所には宝篋印塔ほうきょういんとうや江戸時代の墓石がいくつも見られます。



▲文化5年の宝篋印塔 写真提供 高橋宏和氏

また、この場所は、戦国時代の山城、小舟城の南の麓にあたり、位置的に大変近接しています。照願寺が毘沙幢に存在したのは、寺伝によれば貞応元年から正安2年（1300）までの約80年間。照願寺と小舟城の関係は明らかではありません。照願寺の開基の高沢氏の居城は、現在は高沢城として鷺子の照願寺（現在地）の近くに位置します。高沢氏の居城の

変遷についても問題となるどころです。

照願寺は正安2年（1300）に鷺子の春丸に移転します。移転した理由や春丸が選ばれた理由は不明です。現在の国道293号線で鷺子に入り、鷺子橋と千鳥橋の間の北側のなだらな斜面に伽藍がらんがあったといわれています。ここには「十二塚」という地名が残っています。

現在は畑になっていますが、一面に宝篋印塔の基台部分が置かれています。おそらくここに照願寺があった時代の墓塔群の一つと思われる。



▲春丸の照願寺跡（鷺子）



◀宝篋印塔の基台（春丸）

春丸に190年所在した照願寺は、火災に遭い、延徳2年（1490）に現在地に移転しました。

現在のように檀家制度に基づいて寺が安定的に存在できるのは、一般的には寺請制度の始まる江戸時代以降のこととされます。それ以前は寺と檀家の結びつきが弱く、檀家が寺の経済的な支えではなかったため、寺は経済的基盤を求め、また領主間の争いに巻き込まれるなどして度々移転していました。

特に水戸藩の場合は2代藩主光圀と9代藩主斉昭の治世下で寺社改革が断行されたため、江戸時代においても寺社が移動し、また潰されることも珍しくありませんでした。

市内の寺社も、江戸時代以前に創建されたほとんどが移転を経験しています。

また、戦国時代に移転している場合は、戦乱での被害、特に市内の寺社の場合は部垂へたれの乱（1529 - 1540）の影響を強く受けています。照願寺は部垂の乱の影響は受けなかったようですが、他方、織田信長と大坂の本願寺勢との戦には参加しています。

そのような移転の中でも寺を守り、現在に至っています。

※棧敷二郎さんに調査の協力をいただきました。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450